

## 本誌が第五十巻に入るに當つて

本誌はこの号を以て第五十巻に入る。創刊後五十年を迎えたのである。

月刊雑誌の発行としては一応長いことといえよう。世界にこの長さの続いている月刊雑誌が幾つあるか知らない。広い世界、殊に現代文化の時当長い国々では、必ずしも稀ではないかもしれない。我国において、第五十巻の月刊が幾つ現存しているか数えてみたことはないが、明治元年から今年で八十五年の間で、五十年つゞけられているものは我国として長いことといつてよからう。

本会がフレイベル会の名において創立されたのは明治二十九年であり、四年の後明治三十四年一月、月刊『婦人と子ども』を創刊した。本誌の前名であり、これを以て本誌の第一巻とする。先づ当時の保育界の先覚諸氏の熱意に深き尊敬を捧げ、その後本誌を育成して来られた多くの協力者諸氏に感謝を表せざるを得ない。

大正七年、会名を日本幼稚園協会に、誌名を『幼児の教

育』と改め現在に至つている。誌名の改正は、婦人と子どもという、稍一般的名称から、幼児教育の専門雑誌的名称に進んだものといつてよからう。『婦人と子ども』時代から、幼児教育中心の趣旨に変わりはなかつたが、それを表面にかゝげたものといえる。而して、児童教育、小学校教育についての教育雑誌は既に多くあり、また、教育雑誌といえば、小学校教育のものと考えられるなかにおいて、就学前の教育に関する教育雑誌の存在を標榜せんとしたものである。

爾来、その志に対して、その実の甚だ伴わないことを遺憾とし、編集発行の任にあたるもの微力を恥ぢざるを得ないが、各方面の好意と協力については深謝にたえない。殊に、本誌の古き愛読者各位の終始変らざる友誼に対しては常に感銘しているところである。敢て友誼というのは、その人々の本誌に対する期待が、たゞに読者としてだけでなく日本の就学前教育のための本誌の存在と使命の助長育成にあることを信じて、その親愛と共に激励を強く感ずるからである。本誌

は常にそれに背かざらんことを期しているがなお一層の友誼を懇願してやまない。

今や、就学前の問題は、その重要さに対する覚醒と共に問題の領域は広さと深さを日々に加え来つていゝといつていゝ。先づ深さにおいて、幼児教育の基礎知識として必要な諸学の進歩は著しい。その教育の実際についても、益々精深な考究を要する。殊に、新教育の大目的に向つてその基本としての幼児期の重要性は、革新的であるといつていゝ。その意味において、児童発達の原理を研究する総ての学問は、本誌の重要な知識であり、新教育の識見と方法とは、本誌の不断的指導精神である。これを本誌の内容とすることに怠慢であつてはならない。次に広さにおいて今日の教育觀の拡大と共に、所謂就学前の教育問題は、非常に広範になつていゝ。或は、就学前幼児生活のあらゆる面に、その教育的性質と機能とが周到になつてきているといふべきでもあらう。かくて、幼稚園の問題が、その研究において深められると共に、曰く保育学校、曰く保育所、曰く託児事業、曰く児童遊園、曰く幼児文化、曰く幼児保護これを綜合していえば、幼児の家庭生活、幼児の社会生活の一部に亘る教育的考慮は、現実の細密と深刻と、而して之に対する理想の向上とを、日増しに進めているのである。そのすべてを本誌の関心とすることには偏してはならない。

又、これらの幼児問題の各領域に対して、それだけの分化的研究や推進の努力が払われているのが、今日の發展であ

り、まことに盛観であり、慶賀すべきである。幼稚園にしては、公立、私立、それ／＼の団体が結成せられ、保育所の団体があり、宗教的団体があり、地域的団体があり、かくして各分化活動による発達が促進せられていゝのであるが、本誌はそのいづれにも偏せざるものである。そのすべてが『幼児の教育』の内容事項である以上、幼児の教育という広き立場において、すべてが関心事であり、或は、各分化の關係の上に、本誌の小さいながら大切な職分を感じていゝのである。すなわち、本誌は、就学前教育の専門雑誌ではあるが、その範囲内において、一学、一流、一系統に偏るものではない。どの角度からでも就学前幼児の教育的向上に役立つものは、委く本誌の尊重する処である。

第五十巻に入るに當つて、本誌の心にあるものは、回顧よりも展望である。刊行の長さよりも、本会の一活動としての本誌の貴重な使命である。自らの従来に到らなかつたことよりも、それにもかゝらざる多くの誌友への感謝である。更に、発行一世期を迎える日への希望と、努力を怠つてはならないという自戒である。

本誌の多数の友人諸賢の御健康を祈りつゝ昭和二十六年の新年の辭とする。

昭和二十六年一月 日本幼稚園協会